

専念寺通信

専念寺通信

十月号 (NO. 86)

今年もはや10月となりました。暑さがおさまり、ようやく秋の気配がただよいはじめました。みなさま、お元気でおすごしですか。『通信』10月号をお送りします。

☆秋の彼岸

今年の秋の彼岸は、前半はたいへんな暑さで、お墓参りの檀家さまも汗びっしょりでおいでになりました。けれど、お中日を過ぎる頃から急に気温がさがりはじめ、まさに「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉通りの、秋の涼しさがやってきました。彼岸の入りから明けの日まで、芳名帖にお名前を書いてくださった檀家さまの数は、244件にのぼりました。4人めの孫が生まれましたと報告される方、また、75歳にして自宅を出て、来月から老人ホームに入居しますので住所変更を、とおっしゃる女性の方もいらして、まだとても健康で若々しい様子で、早くも自分で自分の人生を選ぶ姿勢に尊敬の念を感じました。ご兄弟の病気を心配そうにしみじみと話す方、2年前に亡くなった奥さまの最後の様子を、思い出し思い出しながら話す方、親戚一同で待ち合わせをしてにぎやかにお参りする方、私共の狭い前庭が車でいっぱいになる日もありました。写真は専念寺の彼岸花です。「専念寺」の石碑のうしろに毎年咲きます。今年は開花が遅く、お彼岸の最後の日ようやくつぼみが開きました。今年は檀家さまから白い彼岸花の鉢植えをいただきました。10月中旬に赤い彼岸花の近くに植え替える予定です。来年は紅白の花が見られるかもしれません。

☆ ビルマのできごと

9月下旬にビルマで僧侶によるデモがあり、これに対して政府が武力で制圧に乗り出すというできごとが起こりました。滅多に報道されることのないビルマの市民の映像が連日、メディアに写しだされました。若い僧侶が煉瓦色の衣を身にまとい素足で歩き、その列の両側を、普通の若い人たちが手をつなぎあって歩いています。彼らは武装もしていません。ただ歩いています。長い長い年月の圧政に耐えた結果、静かにけれど強い意思で立ち上がったのです。ミャンマーという国名は現在の軍事政権がつけた名前で、この国の多くの人たちはみずからの国を誇りを持って「ビルマ」と呼んでいます。暴力で自国民を押さえ込む方法はいつか必ず破綻します。人口の9割が仏教徒というこの国で、僧侶に対する暴力は人々の怒りを買うばかりでしょう。9月28日、日本人カメラマンが殺されました。私たちはこの国のできごとをこれからも見守り続けたいと思います。

平成19年10月1日

大黒

